

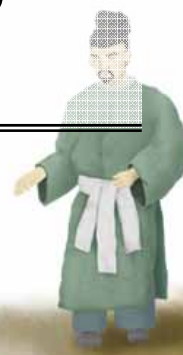
ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界



犬飼村の猿神退治
芝左太夫の賢いお供



犬寺ものがたり
白と黒の二頭の犬



伝説

犬飼村の猿神退治
芝左太夫の賢いお供
犬寺ものがたり
白と黒の二頭の犬

紀行

犬と人
・犬飼を歩く
・『今昔物語集』の猿神伝説
・粟賀法楽寺

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

犬飼村の猿神退治 芝左太夫の賢いお供

むかしむかし、今の姫路市香寺町犬飼（ひめじしこうでらちょういぬかい）のことを沢村（さわむら）と呼んでいました。そのころの沢村には、年に一度の氏神（うじがみ）の祭りに、神へのささげ物として人をいけにえにする、「人身御供（ひとみごくう）」と呼ぶならわしがありました。ある年、堤佐助（つみさすけ）の十三歳になる娘に順番が回ってきました。

「いくら氏神様のためとはいえ、手塩にかけて育てた娘をいけにえにするなんて。」
佐助は深く悲しんでいました。

そんなとき、佐助の家へ、伊勢神宮（いせじんぐう）の教えを広めるために、芝左太夫（しばさだゆう）という男が、毛並みのつやつやした犬を供に従えて訪ねてきました。左太夫は、佐助から人身御供の話聞き、「なんとむごいことを。」と心から同情しました。

「よし。それならば、わたしがその娘の代わりに氏神のところへ行くでしょう。」

左太夫は愛犬を連れて、氏神の社（やしろ）へ向かいました。社殿（しゃでん）の戸を閉めて、中で犬とともに待っていると、夜半過ぎにとつぜん戸が開きました。そして、見たこともないような大きな猿（さる）が、左太夫を一かみにしようとするすごい勢いでおそいかかってきました。

しかしそのとき、左太夫の愛犬がすばやく飛び出し、大猿と犬とは組んだりはなれたり、はげしく戦いました。ついに愛犬が大猿を追いつめ、ノドにかみついてとどめをさそうとしたとき、大猿は急に狸に姿を変えて山の上へと逃げていきました。

それから後、この村では人身御供のならわしはなくなりました。村人たちは左太夫が伝えた伊勢の神様を氏神としてまつことにしました。そして村の名前も、沢村をあらためて犬飼村と呼ぶようになったのです。

（『播磨鑑』、『郷土の民話』中播編をもとに作成）

伝説

犬寺ものがたり 白と黒の二頭の犬

むかしむかし、奈良（なら）の飛鳥（あすか）に都があったころの話です。今の神河町（かみかわちょう）に枚夫長者（まいぶちょうじゃ）という豪族（ごうぞく）がいました。そのころ飛鳥で争いがあり、枚夫長者たち地方の豪族にも軍勢として都にのぼるよう命令が届いたので、戦（いくさ）のしたくを整えて出かけていきました。

数か月後、都の争いもおさまり、枚夫長者はなつかしいわが家に帰ってきました。留守をまかせていた家来がうやうやしく主人を出迎えました。

「長者さまがお留守の間に、鹿（しか）がたくさん集まるよい狩り場（かりば）を見つけました。ぜひ明日、一緒にまいりませんか。」

枚夫長者は狩りが大好きだったので大変よろこび、つぎの日、いつもかわいがっている白と黒の愛犬二頭をつれ、家来と二人で狩りに出かけました。

ところが、これはワナでした。家来は主人が留守の間に、自分が長者になろうと考え、いろいろと計略を練っていたのです。ほかにだれもない山奥まで来たとき、とつぜん家来は弓に矢をつがえ、枚夫長者にねらいを定めてきました。長者は不意を打たれて、どうすることもできませんでした。

死を覚悟（かくご）した長者は、家来に少しだけ待つよう頼むと、供につれていた愛犬たちに、持っていた弁当を分け与えながら語りかけました。

「わしはもはやこれまでじゃ。しかし、おまえたちに一つだけ頼みがある。わしが殺されたら、おまえたちはわしの体をきれいに残さず食べてしましてほしい。わしもこのあたりでは少しは名の知られた長者だ。そんなわしが家来に殺されたとあっては恥（は）ずかしくて死んでも死にきれない。よいな、恥（はじ）を残さないために、わしの体を食べてしまうのじゃぞ。」

愛犬たちは、首をうなだれて聞いていましたが、主人の言葉が通じたのでしょうか、その言葉がおわるやいなや、二頭ともすばやく飛びあがって、一頭は家来の弓の弦（つる）をかみ切り、もう一頭は家来ののどに食らいつきました。

こうして長者は愛犬のおかげで助かることができました。やがて愛犬たちが天寿（てんじゅ）をまっとうして死ぬと、長者は二頭のために墓所にお寺を建て、すべての財産を愛犬たちの供養（くよう）のためにお寺に寄付しました。このお寺は神河町にある法楽寺（ほうらくじ）というお寺で、犬寺と呼ばれて親しまれています。

（『郷土の民話』中播編をもとに作成）

紀行 犬と人

犬飼を歩く

人身御供（ひとみごくう）を要求する神を、いあわせた来訪者が愛犬とともに退治するという犬飼の伝説。江戸時代中ごろの文献である『播磨鑑（はりまかがみ）』や、『播陽万宝知恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』に収録された『めざまし草』、『播陽うつつ物語』、『播州古所説略説（ばんしゅうこしょせつりやくせつ）』などにも見える。このうち『めざまし草』は天正7（1579）年の奥書を持ち、これが正しければ江戸時代になる前から語られていた伝説ということになる。その舞台となる姫路市香寺町犬飼（ひめじしこうでらちょういぬかい）を訪ねてみた。



神明神社



竹宮大明神社殿



天照大神社殿

伝説の舞台となった氏神の社は、神明神社（しんめいじんじゃ）である。境内は伊勢山と呼ばれる山の麓にあり、社殿は二つに分かれている。山の斜面の上にあるのが天照大神（あまてらすおおみかみ）をまつる神明神社の社殿、斜面の下にあるのが、「竹宮大明神（たけのみやだいみょうじん）」と額が掛けられている社殿である。



字宮ノ後付近

斜面の下の「竹宮大明神」の社殿は、地元の伝承では、かつては「宮ノ後（みやのしり）」という地名で呼ばれている平地にあったとされている。現在は地区の公民館やスーパーマーケットがあるあたりだ。しかし、湿地帯で場所が悪かったため、江戸時代前半に現在の神明神社境内に移したという。天照大神をまつる社殿の方は、神社に伝わる伝承では、永禄10（1567）年に、姫路の北の有明山（ありあけやま）から迎えたものとされている。

二つの社殿から石段を下りたところに、今は広場として整地されている平坦地がある。かつてはもう少しゆるやかな斜面だったというが、ここは「キタノヤシキ」と呼ばれ、中世後期にこの地を治めていた喜多野（きたの）氏の屋敷跡と伝えられている。この喜多野屋敷の南東の隅に、「犬塚」と書かれた石碑が建てられている。



伝「キタノヤシキ」



犬塚

また、神社の参道が鳥居をくぐるあたりに、かつて「ひひ塚」があったとされる場所がある。現在は参道を拡幅した際に削られ、断面が見えている状態になっているが、かつては少し盛り上がった塚状を呈していたという。

なお、このサイトでは神を「大猿」として紹介したが、正確には「ひひ」と言うべきである。ここで言う「ひひ」とは、今日アフリカなどにいるヒヒを指すのではなく、化けるほど年をとった猿を指している。



ひひ塚跡



ひひ(『北斎漫画』)

さらに、神社から旧道を南に下り、犬飼から地区外にでようとする地点に、大きな岩盤が露出している。ここにはかつて「馬すべり」と呼ばれたへこみのある岩があり、伊勢の神が馬に乗ってやってくるときに、馬がすべったひずめの跡であると伝えられていた。岩自体は、『神崎郡誌』によれば、道路拡幅のため1897(明治30)年ごろに削り取られたとされている。現在の岩盤は、この岩が削り取られた後の姿である。

伝説では、伊勢からやってきた男とその愛犬の活躍で、古い氏神を打ち負かしたとされている。こうした社殿のあり方や、祭神をめぐる伝承から考えると、この伝説には、古くからまつられていた竹宮大明神の後に、伊勢の天照大神がまつられるようになった、という歴史が反映されていると考えられる。

一般的に、伊勢信仰は、室町後期～戦国時代に庶民の間にも広く浸透していったとされている。伝説に出てくる男とは、全国をまわって伊勢への参詣を勧めるとともに、参詣の際の宿所を提供するなどした御師(おし)と呼ばれた宗教者であった。



馬すべり跡

犬飼の神明神社の場合、犬飼にまつられるようになった年代が伝承では永禄10(1567)年とされ、こうした伊勢信仰の広まりの一般的傾向とよく一致する。あるいは、このころ新たに伊勢の神を村の氏神とするにあたって、古い神との交代をスムーズに進めるために、こうした伝説が語られ始めたのではないか。その際、伊勢の御師が関与していた可能性が高いと考えられる。

『今昔物語集』の猿神伝説



篠山市犬飼 大歳神社

香寺町犬飼の伝説のように、猿などの人身御供を要求する神を、外来者が犬とともに退治するという話は、全国的に多数の類話が存在する。県域でも篠山市犬飼（ささやましいぬかい）や姫路市広畑区才（ひめじしひろはたくさい）にほぼ同じ内容の伝説が見られ、篠山市の場合は村の名前も同じく犬飼である。

こうした猿神退治型伝説は、時期的にも古くから定着していたようで、12世紀に編纂された『今昔物語集（こんじゃくものがたりしゅう）』には、飛騨国（ひだのくに＝現在の岐阜県北部）と美作国（みまさかのくに＝現在の岡山県北部）の二つの話が収録されている。いずれも若い女性の人身御供を要求する猿や蛇の神に対して、外部から来た男が犬とともにこれを退治し、その後人身御供の習慣は途絶えたとするものである。



篠山市犬飼 大歳神社

この話の源流は中国の説話集まで行き着くことも指摘されている。3世紀～6世紀に成立した『搜神記（そうじんき）』巻19には、現在の福建省（ふっけんしょう）の話として、大蛇の神に少女を生贄（いけにえ）にするならわしがあったところ、ある娘がみずから志願して犬とともに大蛇を退治したという話が記されている。



姫路市広畑区才 犬塚

さて、猿神退治伝説をめぐるのは、明治の昔から、そこで語られている人身御供が実際に太古の日本で行われていたかどうかをめぐる、さまざまな論争が繰り返されてきている。しかし、ここではその点に深入りすることは避けて、参考文献ライブラリーにあげた小松和彦氏の編著書と六車由美氏の著書をご覧くださいことをお勧めするに止めておこう。ここで注目しておきたいのは、全国的な広がりを持つこの伝説が、各地域に伝わり、定着していった過程についてである。

香寺町犬飼の事例は、この点を考える上で興味深い。村に新しく伊勢信仰が受け入れられていく過程で、こうした話が定着していったと推定できるためである。これは、伝説の伝播・定着について、宗教者が大きな役割を果たしていた事例と言える。この点については、もう一つの伝説を紹介しながら、また述べてみたい。

栗賀法楽寺

もう一つの犬の伝説として、このサイトでは神河町中村（かみかわちょうなかむら）の法楽寺（ほうらくじ）の開基伝説を紹介している。この話は、古くから「播州犬寺（ばんしゅういぬでら）」の縁起として、地域ではよく知られていた話である。法楽寺境内には、本堂の前に白犬・黒犬像がまつられている。



法楽寺本堂



開山堂



山門



白犬像



黒犬像

中村から南に行った福本（ふくもと）の福山集落（ふくやましゅうらく）には、牧夫長者（まいぶちょうじゃ）の屋敷跡と伝承されてきたところがある。現在は稲荷の祠（ほくら）がまつられている。その背後の山頂付近には、犬の供養塔とされる宝篋印塔（ほうきょういんとう）と五輪塔（ごりんとう）もある。宝篋印塔は南北朝期の形式を示す優品である。そこから谷を一つ隔てたところにある五輪塔は、各時代のものを寄せ集めたものようだ。



伝牧夫長者屋敷跡



宝篋印塔のある山



福本福山宝篋印塔 (写真提供：
神河町教育委員会)



福本福山五輪塔 (写真提供：
神河町教育委員会)

また、神河町の北部、長谷（はせ）地区にも犬塚がある。現在の「犬塚」石碑は新しいものであるが、背後のお堂には宝篋印塔がまつられている。長谷に伝わる犬塚伝説は、法楽寺伝説の後日談ともいえるもので、牧夫長者の妻が、夫の地位を奪おうとした家来に味方したことを恥じて出家し、この地に清水寺（せいすいじ）という寺を建てて隠棲したとのものである。現在は長谷地区と呼んでいるが、江戸時代までは犬見村（いぬみむら）と呼ばれていて、長谷を流れる市川の支流を犬見川と呼んでいる。



神河町長谷 犬塚



清水寺



犬見川

なお、このサイトでは小学生にも読みやすくするために省略しているが、犬寺伝説には、牧夫長者の留守中に、妻が家来と恋仲になってしまっていた、との話が含まれている。長谷の伝説は、この話を踏まえたものである。

この法楽寺の犬寺伝説は、比較的古くからよく知られていたようである。鎌倉時代後期に成立した『元亨釈書（げんこうしゃくしょ）』巻28に、現在の伝説の原型が記されている。『元亨釈書』は全国的に広く読まれていた書物である。また、南北朝時代の播磨の地理・歴史書である『峰相記（みねあいき）』にも、やや変形された話が見られる。

さらに江戸時代の絵画作品として、『犬寺縁起絵巻（いぬでらえんぎえまき）』（大阪市立美術館蔵）もある。この絵巻は、法楽寺とは関係のないところで、江戸時代の都市の富裕層が楽しむ作品として制作されたと考えられている。犬寺伝説が、すでに江戸時代には有名な伝説として、播磨以外の地域でもよく知られていたことがうかがえるのである。

さて、この話も猿神退治伝説と同様に、源流は中国の怪異記録（「志怪〔しかい〕」と言う）にさかのぼることが指摘されている。先にあげた『搜神記』の続編にあたる、『搜神後記（そうじんこうき）』に、つぎのようなよく似た話が載せられているのである。現在の浙江省（せっこうしょう）から都に労役として駆り出された男が、休暇をもらって故郷に帰ってきた。しかし、男の留守中に、妻は召使と恋仲になってしまっていた。帰ってきた男を迎えた妻は、召使に弓矢で男を狙わせながら、男に食事を出して食べるように勧めた。男が死を覚悟したその時、飼っていた犬が召使を倒し、男は難を逃れた、という話である。犬寺の伝説と、話の骨組みは大変よく似ており、原話とみなして差し支えないと考えられている。

香寺町犬飼の伝説は、伊勢の神がこの地区に迎えられた戦国時代ごろ以降の定着と考えられるが、犬寺伝説は、『元亨釈書』に見えるので、遅くとも鎌倉後期には成立していたことになる。いずれも共通するのは、中国にまでさかのぼる原話があることと、宗教者がその伝播や定着に大きな役割を果たしていたと見られる点である。歴史の中では、宗教者がさまざまな古典から材料を得て、地域の実情に合わせてアレンジすることが、かなり古くから、そしてしばしば行われていたようだ。

このように、伝説のルーツをたどっていくと、中国にまで行き着く場合がある。紀行文「岩と樹木」で紹介している「おりゅう柳」伝説も、類似した事例である。

用語解説

【『播磨鑑』】はりまかがみ

宝暦12（1762）年ごろに成立した播磨の地理書。著者は、播磨国印南郡平津村（はりまのくにいなみぐんひらつむら＝現在の加古川市米田町平津）の医者であった平野庸脩（ひらのつねなが、ひらのようしゅう）。享保4（1719）年ごろから執筆が始められ、一旦完成して姫路藩に提出した宝暦12年以降にも補訂作業が進められた。著者の40年以上にわたる長期の調査・執筆活動の成果である。活字化されたものは、播磨史籍刊行会校訂『地志 播磨鑑』（播磨史籍刊行会、1958年）がある。

【『播陽万宝知恵袋』】ばんようばんぼうちえぶくろ

天川友親（あまかわともちか）が編纂した、播磨国の歴史・地理に関する書籍を集成した書物。宝暦10（1760）年に一旦完成したが、その後も若干の収録書籍の追加が行われている。天川友親は現在の姫路市御国野町御着（ひめじしみくにのちょうごちゃく）の商家に生まれた。収録された書物は、戦国末・安土桃山時代から、友親の同時代にまでわたる125件に及ぶ。これらのほとんどは、現在原本が失われてしまっており、本書の価値は高い。活字化されたものは、八木哲浩校訂『播陽万宝知恵袋』上・下（臨川書店、1988年）がある。

【『めざまし草』】めざましくさ

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻42収録。天正7（1579）年永良鶴翁（ながらかくおう）著。播磨国内のさまざまな奇談、逸話を集めたもの。著者の永良鶴翁については詳しくはわからないが、現在の市川町西部にあった永良荘（ながらのしょう）に居住した人物と見られている。なお、奥書には「芦屋道たつ」という人物が見えるが、これは『播陽万宝智恵袋』巻15収録の『播磨国衛巡行考証（はりまこくがじゅんこうこうしょう）』の著者である「芦屋道建」を指すと見られる。道建は、天正ごろ活動した人物であるので、本書も天正ごろの書物と見てよいだろう。

【『播陽うつつ物語』】ばんよううつつものがたり

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻39収録。奥書によると、天正元（1573）年12月10日の夜、赤松了益（あかまつりょうえき）が久保玄静（くぼげんせい）に話した内容をまとめたもので、剣持清詮（けんもちきよあき）が所蔵していた本を三木通識が元禄年間に転写し、延享5（1748）年に校訂したものとされる。播磨の古跡の由来や物語が、別の本からの引用を含めて記されている。著者の赤松了益は、龍野赤松氏の一族で、戦国末期から安土桃山時代にかけて龍野で医業を営む傍ら著述を行った人物とされ、『播陽万宝智恵袋』にも他に3点の著書が収録されている。

【『播州古所跡略説』】ばんしゅうこしよせきりやくせつ

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻13収録。宝暦6年天川友親（あまかわともちか）の著。播磨の名所、寺社、故事、伝説など101項目を記す。著者の天川友親は『播陽万宝智恵袋』の編纂者。詳しくは、本用語解説の『播陽万宝智恵袋』項目を参照されたい。

用語解説

【『今昔物語集』】こんじゃくものがたりしゅう

12世紀成立と見られる説話集。著者は大寺院の僧侶と考えられているが、詳しくはわかっていない。天竺（てんじく＝インド）・震旦（しんたん＝中国）・本朝（ほんちょう＝日本）の三部構成で、合計1,000話以上が収録されている。

ただし、未完成のまま残された書物と見られ、全体の構成は完結しておらず、また地名などを中心に記述が空白のまま残されている箇所も多い。また収録された説話は、大部分が数多くの先行文献から採録されたものと見られているが、仏教的な功德、靈験譚などの仏教的説話から、武士の武功や民間の奇談異聞などの世俗的説話まで、幅広い内容の話がみられる。平安時代後期の社会相を知る上で貴重な文献。

【『搜神記』】そうじんき

東晋（とうしん）王朝の官僚である干宝（かんぼう）が編纂した怪異話、奇談を集めた書物。こうした書物のジャンルを「志怪（しかい）」と呼ぶ。本書が著された六朝時代（3～6世紀）は、こうした「志怪」が現れはじめ、盛んに記されていた時代であった。著者の干宝は、王朝の歴史編纂にも携わっており、『晋紀（しんぎ）』という晋王朝の歴史書も著している。『搜神記』にも、こうした干宝の学識が反映されていると見られていて、収録された話題の幅が広いことや、過去の史料や書籍からの引用が見られる点が特徴とされている。

【宝篋印塔】ほうきょういんとう

本来は「宝篋印陀羅尼經（ほうきょういんだらにきょう）」を納めるための塔。日本ではとくに石塔の場合、墓碑や供養塔として建てられるようになっていた。石塔としては、鎌倉時代中ごろからの遺品が残る。形状は、方形の基礎、基礎よりも小ぶりの塔身、笠形の屋根、円筒状の相輪からなる。屋根には四隅に隅飾（すみかざり）と呼ばれる突起が立てられる。この隅飾りの開きぐあいに時代ごとの特徴がよくあらわれ、古いものほど直立し、新しいものは外側へ開いていく傾向がある。

【五輪塔】ごりんとう

供養塔、墓塔として造られることが多かった仏塔の一種。石製のものが多く残る。下から順に、基礎にあたる方形の地輪（ちりん）、円形の水輪（すいりん）、笠形の火輪（かりん）、半球形の風輪（ふうりん）、宝珠形（ほうしゅがた）の空輪（くうりん）の五段に積み、古代インドで宇宙の構成要素と考えられていた、地、水、火、風、空（五大、ごだい）をあらわす。密教の影響が強く、石塔としては平安時代末期からの遺品が知られている。

【『元亨釈書』】げんこうしゃくしょ

鎌倉時代後期に成立した仏教史書。日本への仏教伝来から元亨2（1322）年までの僧侶の伝記や諸事跡を記したものの。著者は禅僧の虎関師錬（こかんしれん）。南北朝時代に、朝廷の許可によって大蔵經（だいぞうきょう、仏教の主要經典集）に加えられ、永和3（1377）年に初版本が刊行されている。

用語解説

【『峰相記』】みねあいき

峰相山鶏足寺（みねあいさんけいそくじ＝現在の姫路市石倉の峰相山山頂付近にあった寺）の僧侶が著した中世播磨の宗教・地理・歴史を記した書物。原本は本文冒頭の記述から貞和4（1348）年ごろに成立したと考えられる。現存する最善本は揖保郡太子町（いぼぐんたいしちょう）の斑鳩寺（いかるがでら）に伝わる写本で、奥書から永正8（1511）年2月7日に書写山別院（しょしゃざんべついでん）の定願寺（じょうがんじ）で写されたものであることがわかる。活字化されたものは、『兵庫県史』史料編中世4（兵庫県史編集専門委員会、1989年）や、全文口語訳をした、西川卓男『口語訳『峰相記』 中世の播磨を読む』（播磨学研究所、2002年）などがある。

【『搜神後記』】そうじんこうき

干宝（かんぼう）著『搜神記』の続編を標榜した書物。鬼神や動物にまつわる怪異話が目立ち、仏教に関する話題が収められている点が特徴とされる。著者は陶潜（とうせん、365～427）とされる。陶潜は字（あざな、通称）は淵明（えんめい）。現在の江西省の人で、自由な隠遁生活を好み、詩の「帰去来辞（ききょらいじ）」の作者としてよく知られている。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
峰相記(収録:『兵庫県史』史料編中世4)	1989	編集:兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
播州古所跡略説(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播陽うつつ物語(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州諸所古今物語(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播磨鑑	1958	著者:平野庸修、校訂:播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
日本伝説 播磨の巻	1918 (1978復刻)	編著:藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会
郷土の民話 中播編	1973	編集:"郷土の民話"中播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
兵庫の伝説	1980	編著:兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
兵庫のむかし話釈講	1983	著:船知慧、さしえ:森崎伯霊	中央出版エージェンツ
日本伝説大系 8 北近畿編	1988	編集:福田晃	みずうみ書房

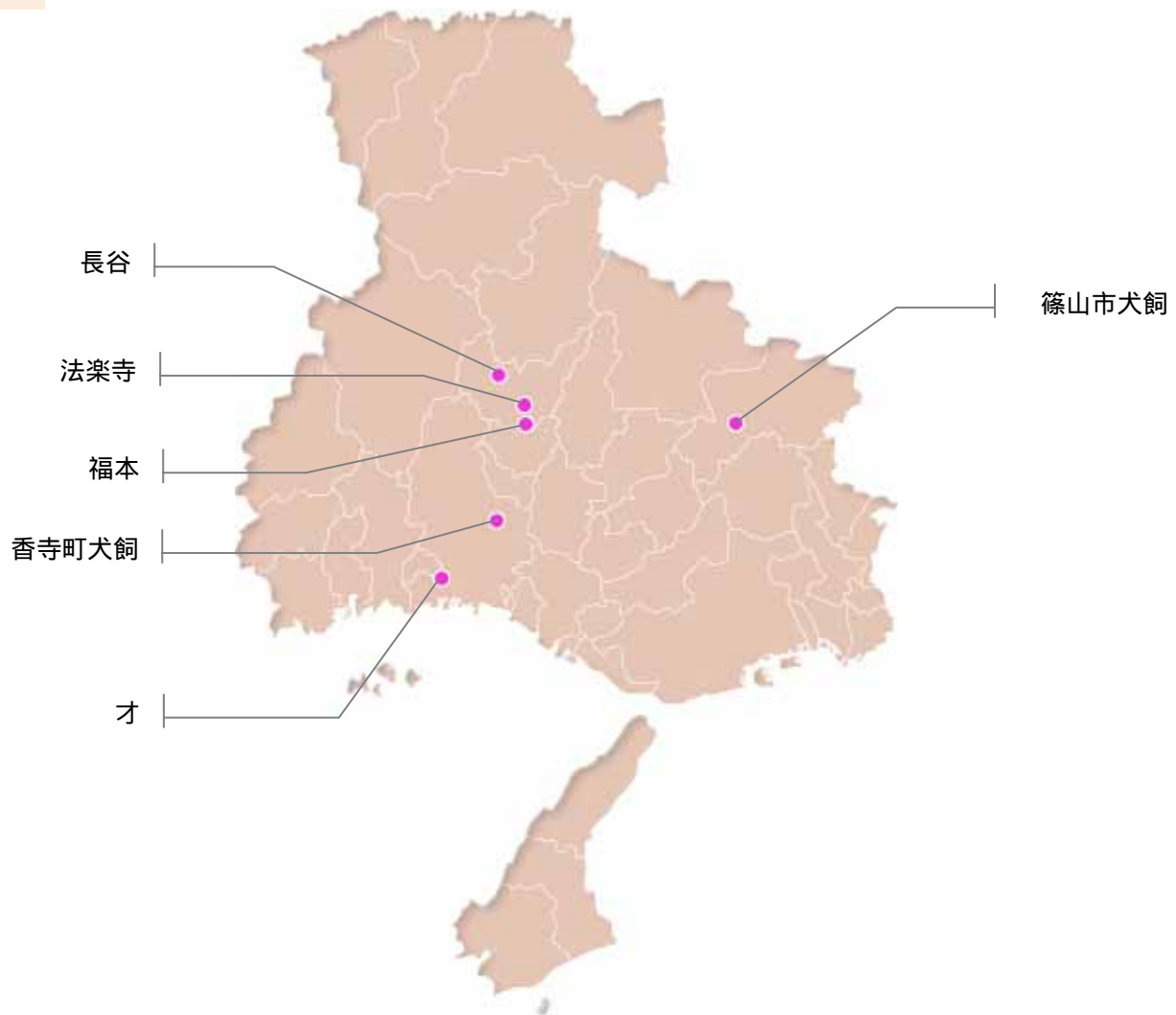
歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
搜神記(収録:中国古典小説選2『搜神記 幽明録 異苑他』)	2006	編纂:干宝、編集:竹田晃	明治書院
搜神後記(収録:中国古典文学大系24『六朝・唐・宋小説選』)	1968	編纂:陶潜、編訳:前野直彬	平凡社
今昔物語集 5(新日本古典文学大系37)	1996	校注:森正人	岩波書店
元亨釈書(収録:新訂増補国史大系31『日本高僧伝要文抄・元亨釈書』)	1965	編集:黒板勝美	吉川弘文館
十六郡寺院縁起(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
めさまし草(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
日本伝説集	1913 (1973復刊)	高木敏雄	郷土研究社 (復刊:宝文館出版)
伝説の兵庫県	1961 (2000再刊)	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター (再刊)
郷土の民話 丹有編	1972	編集:"郷土の民話"丹有地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
兵庫のむかし話	1978	編著:兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
新稿 社寺参詣の社会経済史的研究	1982	新城常三	塙書房
かんざき夜話 - - 史話と民話 - -	1987	編集:神崎町文化協会郷土史研究部会	神崎町文化協会
日本伝説大系 別巻1 研究編	1989	編集:荒木博之他	みずうみ書房
新版 今昔物語集の世界	1999	池上洵一	以文社
『犬寺縁起絵巻』の成立 付・翻刻 (収録:『学習院女子大学紀要』1号)	1999	徳田和夫	学習院女子短期大学・学習院女子大学
再び『犬寺縁起絵巻』について(収録:『学習院女子大学紀要』2号)	2000	徳田和夫	学習院女子短期大学・学習院女子大学
怪異の民俗学 7 異人・生贄	2001	責任編集:小松和彦	河出書房新社
神、人を喰う 人身御供の民俗学	2003	六車由美	新曜社
香寺町史 村の記憶 地域編	2005	編集:香寺町教育委員会 町史編集室	兵庫県香寺町
丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし 8	2008	編集:「丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし」編集委員会	(財)丹波の森協会

その他の参考資料

書籍名	刊行年	著者名	発行者
犬飼地区神明神社史跡探索(平成20年10月26日(日)実施)(見学会パンフレット)	2008	編集:犬飼歴史研究会	犬飼地区自治会・町史編集室・ため池クリーンキャンペーン&コスモまつり実行委員会

所在地リスト



篠山市犬飼	篠山市犬飼
長谷	神河町長谷
法楽寺	神河町中村1048
福本	神河町福本
才	姫路市広畑区才
香寺町犬飼	香寺町犬飼

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日